

第 77 話 (62 頁) 馬と飼育係

馬の飼育係が馬の麦をごまかして、よその人に売っていましたが、馬のことは毎日きれいにしていました。すると、馬がいました。「もし、ほんとうに、わたしをりっぱにしたいのなら、わたしの麦をよそに売ったりしないでください。」

「同じ話がイソップ寓話集にもあって、岩波文庫版(中務哲郎訳)だと『馬と馬丁』(319話)の題で登場する。こっちも同じように短くて、話もだいたい似ている。」

「あえて違いをいうなら、アーズブカでは馬の麦の横流しが日常的。イソップでは、宿屋の主人に売って夜どおし飲んだ、と一過性の印象が強いことかな。」

「アーズブカの方が、ちょろまかしは少しずつ長く、ということになって犯情が悪い。」

「ここでは、馬が対等に口を利いていて、人間である飼育係をたしなめている。立場が逆だよ、本来は。」

「横流しが発覚しないように、見た目だけきれいにしておいたってだめだぞ、って、馬から言われては、飼育係は面目まるつぶれだ。」

「そんな工作をしても、馬は栄養が足りなくて力が出ないだろうに。」

「なので、馬から言われなくても、いずれはばれる、というわけか。」

「この馬は荷役用だろうが、飼育係は馬の持ち主から雇われている。」

「馬の持ち主に知られたら、即刻首だね。馬が持ち主に通報するかもしれないし。」

「見栄えなんかより中身が大事。そんなメッセージが込められているのではないかな。」